

心のかくれば

華族女學校教授 野口幽香

これは或夏休に廿年ぶりで故郷の家を跡見に行きたる時の記事の一部であります、もとより不文姦に擧ぐべきものではありませぬが、母が非常に植物を愛しました爲に、知らず其感化を受け成長したる今日、世の風波烈しき時には、一寸花の影にかくれて、無限の慰藉を與へられますのも、つまりは母の家庭教育のおかげと、いつも感謝して居ります、此記事の中にはちよいとその様子が見えますから其爲と、今一つは、人間には何でも故郷などを追懐して、神聖なる心を養ひませんと、利己一偏の無趣味な人になりかふせすから何でも幼時を追想せしめる様な材料を残す事は母として心掛けてやるべきであるといふいつもの私

四

の考から、左に記して見る事に致しました。借家に生れ借家に育ち、又しても又しても親の轉任に伴はれる子供は、左の様な感情は到底得られぬ事と思ひまして、何とか他の方法にて補ふものなればと、いつも私は思ふのであります。

わが家の跡今は射的場となりて行かれぬこともありとさゝたれば、けふは如何にと道行く人にさゝしに、なしとの答にいざや向ふ、城の東方少しの地は昔のあき屋敷其儘に残りしかば、はや昔にかへりし心地す、それより射的場に入りしも、一面の芝生に何處をどことも見わけ更につかねばまづ城の石がけをわてに歩み出せしに、堀はさすがに昔の儘學校がへりにつみたりしいちごの木など其儘なり、次第に歩めば生れて十六才迄朝夕めなれし松の木其儘なる前に

來りぬ、あゝなつかし嬉し、吾はしばし涙とい
 めあへどりき、こゝは幼きわれ、兩親弟妹と共に
 に最平和なる生活を送りし所なり、きたなき吾
 家のありたる處なり、わがホーム！われは實に
 ホームを思ふ毎にこゝを思はざるはなかりき、
 爾來廿年の歲月、この景色のわが夢に入りしは
 幾度ぞや、家なけれども石がけも堀も松も城の
 窓も少しも變らず、あの城の窓より人ののぞき
 し時われはいつも下よりそれをながめたりき。
 吾は冬の日吾家の椽に座して母の手助けに糸車
 まはせる時、晝過ぎになればあの松の爲に椽の
 日影となるをなげきし事常なりきわゝ其松！幾
 年の風雨にも昔の儘の姿にて、今又かくまでも
 吾を喜ばしむるか。隣家との界の向ふにも亦松
 わり、大松と稱へて、雷の鳴る時にはあの松に

落ちはせぬかと、祖母ののたまひしを覺えぬ。
 學校より歸れば第一の樂みたりし柿の木は、此
 邊にありしならん、秋の末美しくなりし柚は、こ
 らあたりなりけんなど、跡もなきに空しく探
 したりき。堀ばたにありしものは或は残りもや
 せんと、一面に敷となれる間くゞりていづれば、
 わゝ嬉し、吾家の前に植えたりし花菖蒲の今は
 一面にひろがりて、堀の半に達し、隣家にて植え
 置きし蓮も左右にひろがりて今は眞盛り、香ば
 しき香はわが心をますく清ましめナギコーホ
 ネなどわりしまゝ今も榮えぬ。あゝ廿年前のわ
 れ廿年前の吾家！十五才の小娘たりしわれは浪
 風わらさ人生の事など夢にも知らず無心にして
 愛らしかりき、わが母と祖母とは植物を愛して、
 四時花のたへぬ様にと心盡し給ひたりしが、今

も弟と共に、此家を追想し、家の圖にありし植物などかき列ぶるものあるなり、世間知らずの小娘にもきたなしと思へりし吾家、もしあらばわがなふてわれらのかくればとせんものを、今は影だになきを如何せん。

夏の夕方妹負ひてあき屋敷に行き一面に咲ける月見草に恍惚として居りしに背にありし兒は隣家の娘のうたふ節にわはせて、つきみさうと歌ひし事今も覚えぬ、其花今は一面に廣かりて吾家の跡までも、さるに隣家の娘は不幸心狂いて永く親を煩はし、過ぎし年死せしときさゝしのみ、わが東隣の家の主人は、夜毎の酒に氣嫌あしく、いつも大聲出して怒るを常とせしが、今は行衛もわからぬ迄になりぬときさく、わが祖母も父も母も皆逝きて稚なかりしわれら三人のみ

残りぬ、草木は今も昔に變らぬものを、などとやかく幼時の追懐に茫然と自失せるが如く、家も人も昔の儘眼前に見え、弟とまゝとせし梅の木の下なる幼きわれになりし心地しては、眼さめたる如くに、又廿年後の今にかへりぬ。

* * * * *

体量と腦量との比較

	体量	腦量
初生兒	一	1/7
十三才	一	1/18
成人	一	1/45